

# 係留気球で気象観測

## 筑波大院生 駒ヶ根高原で合宿

筑波大学（茨城県）で地球科学を専攻する大学院生ら12人が28日、駒ヶ根市の駒ヶ根高原などで気象観測を実施した。谷によって生み出される気流の観測を目的としたもので、院生らは27日から2泊3日の日程で市内に滞在。28日は宿泊先の駒ヶ根キャンプセンターで観測用の係留気球を上げ、上空の気象データを収集した。（堀木俊典）

教育、研究活動の一環で実施している合宿形式の観測。希望する院生が参加しているといい、気流構造の研究のほか、観測技術の向上を図る狙いがある。今回は伊那谷の地形が生み出す複雑な気流を観察しようと、中央アルプスのロープウエーがある駒ヶ根高原一帯を観測地に選んだ。データは市街地から中央

アルプスまでの5カ所のポイントで収集。キャンプセンターではヘリウムを充填した係留気球を上げ、上空約3000メートルの温度、湿度、気圧などを早朝と昼、夕方の方計3回観測した。

境系の若月泰孝助教は「駒ヶ根は」スケールの違う谷が織り成す気流構造を観測しやすい場所」と指摘。28日は曇り空が広がり、観測条件に恵まれなかったが、学生には実習を通じて「観測技術を身に付けてほしい」と期待していた。



駒ヶ根キャンプセンター駐車場から観測気球を上げる筑波大の院生ら